

総括討論会雑感

(前巻) 島田 隆

一 シムラウムの問題等についで各討論  
では経済学的な「フック」をとりあげての感  
見が多かったようであるから、総括討論にお  
いては、それを家と家組合、部落に結びつけ  
て考えよう」という司会者の意向は必ずしも  
充分に実現されたとはいえない。

討論の話題は戦後農村の変遷に絞られ、  
まず、個人単位たるべき組合が現実的にはま  
だ単単位制を除くついでに官公的組織の  
者の擴張がみられる山村大系、協同組合の商  
品作物の運送ですら旧来の部落組織に依存す  
る曲山、同じ商品生産物といっても価格変動  
の大きいもの(たとえば花作り)の生産販売  
に於いて旧来の組織、生産者の変化がみられ  
る仙台南市内、戦後盛産の畑作物が水田村に  
対して変化をみせる大友近郊などの例が論じ  
られ、ついで町村合併に伴う部落形態の変化  
について各地の例が報告された。これで、地  
域による差異、また視座のちがいが分析の担  
當はあるとしても、漸進的ながら変化しつつ  
ある戦後農村社会の姿態が知られた。

それについて、漁業や農業の協同組合がま  
だ単単位であるのが通例だとしても、その取  
組の内部の個人が、戦後の経済や政治などの条  
件によつて、どのような生活形態に変化してき

たか、したがってまた家そのものの内容がど  
う変ったかということ、つまり戦後の家の存  
在条件とその形態について、もっと立ち入っ  
た議論がほしいかった。これというのも、各學  
問分野で、その種の精査な研究がまだ進んで  
いないためであるうか。そうとすれば、各地  
で一斉に着手しなければならぬ問題である  
う。

このことは、ひいては家連合やいわゆる部落  
組織という形の残存度の問題につながる。本  
来個人単位たるべき近代的な組合組織が、家  
連合や部落の形をよまえているといっても、  
これらを構成する家や個人の変化もあるのだ  
から、その意味は現段階の条件に支えられた  
新しいものであるう。

右のような線で實際をこまかく追求するこ  
とが、さきほどの司会者の意向に沿うゆえん  
であるう。それにつけても、明治二、三〇年  
代に、日本資本主義がほぼ確立したものとす  
れば、その後は少くとも理論的には個人本位  
の生活形態が優越するはずである。だから家  
や村という視座から日本近代社会を見るだけ  
でなく、逆に個人を中心に据えて、その生活  
態度の限度の変化を見きわめていくという方  
法も、積極的にとられてよい。この二つのや  
り方は、いずれは同じことなのであるが、と  
くに近代の生活形態をその諸条件に即して考  
えるには、後者のやり方を意識的にとりあげ  
ることも必要であるう。

さらに、討論でもしばしば使われ、町村合  
併と選挙との関係の條にも問題になった、い  
わゆる部落なるものの概念については、討論

中にすでに注意されたように、部落とはなに  
かをもう一度反省しなおす必要がある。  
実はこれらはいずれも今年度大会の際「  
村落共同体」の規定につながるものであるか  
ら、そのよきに少しでも収穫を得て前進した  
ものである。